

## 「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿 3月8日（金）放送分

### テーマ「奄美歳時記」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。県立奄美図書館です。今週のこの時間は，今年度第12回目の，シリーズ「奄美歳時記」をお送りします。

3月は，暖かな陽気にすべての草木がいよいよ茂るという意味の「弥生（いやおい）」がつまって「<sup>やよい</sup>弥生」と呼ばれます。自然豊かな奄美では，高い山でも，森を流れる水辺でも，海岸でも，道路の脇でも，春夏秋冬を問わずにいろいろな花を見ることができます。

その奄美の春は，山でイタジイがいっせいに<sup>もえぎ</sup>萌黄色に芽吹き，晴れた日などには山一面が<sup>こがね</sup>黄金色に輝きます。そして，その中にアマミセイシカの白い花，タイワンヤマツツジの赤い花などの多彩な色を楽しむことができます。

レイチェル・カーソンの著書「センス・オブ・ワンダー」の一節を紹介します。

「子どもたちの世界は，いつも生き生きとして新鮮で美しく，驚きと感動にみちあふれています。残念なことに，わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や，美しいもの，畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ，あるときはまったく失ってしまいます。

もしもわたしが，すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら，世界中の子どもに，生涯消えることのない『センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性』を授けてほしいとたのむでしょう。

（中略）

妖精の力にたよらないで，生まれつきそなわっている子どもの『センス・オブ・ワンダー』をいつも新鮮にたもちつづけるためには，わたしたちが住んでいる世界のよこび，感激，神秘などを子どもといっしょに再発見し，感動を分かち合ってくれる大人が，すくなくともひとり，そばにいる必要があります。」

レイチェル・カーソンは、アメリカのベストセラー作家であり海洋生物学者でした。子どもに驚きの目をもたせたいと考えたレイチェルは、甥のロジャーと一緒に森や海岸を探検することで感じた、自然の雄大さや神秘さについて書き、雑誌に掲載された「センス・オブ・ワンダー」に手を加えた単行本を出版しようとしています。しかし、がんに冒されていたレイチェルは、出版を前にして、56歳の生涯を閉じてしまいます。そして、彼女の死の翌年に、レイチェルの夢を果たそうと考えた友人たちが原稿を整え、写真を加えて、1冊の本として出版します。

幼い子ども時代は、様々な情緒や豊かな感受性を育むときであり、美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、<sup>あわ</sup>憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになると、レイチェルは考えていました。

そして、自然の知識をほんの少ししかもっていないと感じている大人でも、子どもと一緒に空を見上げて、夜明けや黄昏、夜空にまたたく星の美しさを感じることができるとともに、その感動を分かち合うことが大切であると述べています。また、台所の窓辺の小さな植木鉢にまかれた一粒の種からも、芽を出し成長していく植物の神秘について、子どもと一緒にじっくり考える機会を得ることができると記しています。さらに、地球のすばらしさは生命の輝きにあると信じ、地球の美しさを感じて守るのも、破壊するのも人間であると強調しています。

奄美は、美しい自然で溢れています。その美しさや神秘、不思議さを感じる「センス・オブ・ワンダー」をいつまでも持ち続け、子どもたちにもその感受性を育むために、いつもはあまり気にとめない、身近な花や植物などの自然をもう一度見直し、奄美の自然のすばらしさに驚き、感動する時間を見つけてみませんか。

以上、県立奄美図書館でした。